

参議院常任委員会調査室・特別調査室

論題	視点「金融政策と修飾語」
著者 / 所属	小松 康志 / 財政金融委員会調査室
雑誌名 / ISSN	立法と調査 / 0915-1338
編集・発行	参議院事務局企画調整室
通号	467号
刊行日	2024-6-27
頁	2
URL	https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20240627.html

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください (TEL 03-3581-3111 (内線 75020) / 03-5521-7686 (直通))。

金融政策と修飾語

財政金融委員会 専門員

こまつ やすし
小松 康志

日銀は去る3月19日、金融政策決定会合において、マイナス金利政策の解除を決定した。この決定を報じる新聞各紙の大見出しは、「マイナス金利解除」という何らの修飾も付されない、事実のみを伝えるもので共通していた。解説記事や社説等を含め、この新政策を表すキャッチフレーズ的なものを探してみたところ、見当たったのは「普通の政策」（2024.3.20 毎日新聞）、「金利ある世界」（2024.3.20 日本経済新聞）といったものであった。黒田前日銀総裁の行った緩和政策を表す「異次元の金融緩和」、その政策手段とインパクトを指す「黒田バズーカ」といった語の与える強烈な印象とは対照的な「普通」さである。興味深いのは、「バズーカ」はともかく、「異次元」については、日銀の公表資料(2013.4.4)や黒田前総裁の講演(2013.4.12)などにおいて「量・質ともに次元の違う金融緩和」と記載・発言されているところに端を発する、言ってみれば自己プロデュースによるキャッチフレーズであることである。一方で、「普通の政策」は、3月19日の決定会合後の記者会見における「普通の金融政策を行っていく」との植田総裁の言葉から採られたものであろうが、これは、他国の中央銀行が短期金利を普通の政策手段としているとの文脈を受けたもので、殊更にキャッチーさを意識したものとは思われない。

また、他に異次元緩和（量的・質的緩和政策）の特徴的な点として、政策変更を事前に予告しないサプライズ演出手法を用いたことも挙げられる。1999年のゼロ金利政策以降の市場の予想に働きかける対話重視の政策運営からの大きな転換である。

キャッチフレーズとサプライズという二語から筆者が想起するのは、プロレスである（厳に付言しておきたいが、揶揄するような意味合いでこの語を用いてはいない）。不沈艦といったレスラーの異名や「一寸先はハプニング」という故アントニオ猪木氏の言葉に象徴される先の読めない展開をプロレスが必要とするのは、プロレスのビジネスモデルが観客の期待感の醸成に大きく依拠しているからである。量的・質的緩和政策においても、ターゲットは観客（市場等）の期待感であり、政策遂行に必須のツールがキャッチフレーズとサプライズだったのではないか。日本のプロレスは70年以上にわたって、新機軸を打ち出し、観客層の新陳代謝もあって存続してきた。しかし、金融政策においては、新規手法には限りがあり、観客が入れ替わることもない。初期に効果を上げた量的・質的緩和政策が徐々に神通力を失っていったように見えるのも無理からぬところであろう。

前述のように植田総裁の就任から約1年後の大きな政策変更にはキャッチフレーズはなく、ほぼ正確な事前報道がされるほどにサプライズ感も薄かった。直近の講演(2024.5.8)では、新たな路線は「通常の金融政策の枠組み」としてしている。この修飾語のない普通の道が日本経済を復活させる王道であることに期待したい。